



東九州支部報



韓国山岳會蔚山支部との交流会(5月2日蔚山にて)

韓国蔚山市と大分市は去る2002年に、ワールドカップが開催された時、ともに開催地になったことや、工業都市であるということなどで結ばれた友好の都市である。

一昨年(平成一七年)一〇月、蔚山広域市の韓日友好協会の一行が大分市を訪れた時、その一行の中に韓国山岳會蔚山支部の会員も多数参加しており、事前にそのメンバーから日本山岳會東九州支部と交流の場を持ちたいと要望があり、コンパルホールで交流会がもたれた。

この交流会の場で、今後は相互の交流親善登山を定期的に実施しようということになり、昨年は、韓国山岳會蔚山支部の一行二八名が大分を訪れ、九重山系日韓友好登山会が実施されて、よい結果をおさめることができた。今年は東九州支部が韓国を訪れる番である。

今回の大分からの参加者は十二名で、去る五月二日から六日までの五日間にわたって、蔚山を訪れた。期日が五月のゴールデンウィークということもあり、家庭や所属団体の凝視計画等もあり、参加者は意外と少数にとどまった。

登る山は蔚山市郊外にある、韓国でも有数の登山のメッカである嶺南アルプスといわれる山域が設定された。この山は、標高は1000mから1200m程度であり、高度は比較的に低い、海岸線にも近いので、見た目にもやさしそうに見えるが、

甲斐一郎

嶺南アルプスを歩く 韓国山岳會蔚山支部との交流登山

《 も く じ 》

韓国山岳會蔚山支部 との交流登山	1
犬鳴山へ	2
由布岳(豊後富士)	3
湧蓋山(玖珠富士)	4
琴路岳(能古見富士)	
唐泉山(肥前富士)	5
先達を語る②「野口秋人氏」	5
クラブ紹介④「緑山岳會」	7
今西錦司⑨	8
私の無名山ガイドブック	30
お知らせ	9
後記	10

実際に登ってみると変化に富んで楽しい山であった。

釜山港に着いた時から、帰途につくためチャーターした貸し切りバスに乗るまで、我々の行動中は蔚山支部の仲間が最初から最後まで、会員の家用車を常に必要な数だけ配置し、輸送には何の不便もなかった。また、我々の泊まるロッジの隣に寝泊りし、食事の世話をはじめ生活全般にわたってお世話頂いた。歓迎会のセットはもちろんのこと、こうした日々の食事のお世話や、車の配置、観光の気配りなど、至れり尽くせりのサービスであった。

蔚山という、韓国第二の工業都市の郊外にある山なので、利用者も多く、周辺道路をはじめ施設整備も進んでいる。山麓には古い寺院が多くあり、それらは日本の歴史的建造物よりも古いものが多く、改めて韓国の歴史的深さを痛感した。

今回の日韓親善友好登山会は、当方の参加者がもう少し多ければ一層盛り上がったのではないかと、いう感否めないが、参加者は蔚山支部との交流を十分に深め、当初の目的は大いに果たされたと思う。

何にもまして感謝したいのは、前記したように蔚山支部の心あたたまる歓待である。五日の土曜日は別として、他の三日間はウィークデーにもかかわらず、何台もの車を配置し、また、山行の案内やエスケープルートなどの配置など

は、支部員の組織をあげての協力がなくては、出来ないことと思っただ。

来年は我々がお迎えして歓待する番である。会員が一致協力してその体制をつくり、意義ある親善友好登山が出来ることを念願する。

(号外に報告特集)

月例山行報告

西山・犬鳴山へ

戌(いぬ)にちなんだ山旅

(四月月例山行)

中野 稔

四月二十二日午前五時、二台の車が大阪駅前を別府に向かつて通過した。夜明け前の空気は神聖な感じがする。十キロメートル位遠くの車の音が何となく聞こえてくるのだ。山でも同じように遠くにいる動物や人間の気配が感じられるものだ。かつて、九州百山を目指してた頃、深夜の一時や二時に大分を出発し長崎や鹿児島、宮崎を目指していた。若さもあつたが、殆ど日帰りで大分着は、夜の九時か十時頃だった。母は私が帰

るまで心配して、近所の踏み切りや道路まで何度も行き来をしてくたらしい。あの頃は、すべてに時間があるなんて考えた事も無かつた。明日があるように、来世があるから心配ないさ。今でも超ポス思考は今でも変わらないが、あまり人には喋らない方が賢明かなと思う様になってきた。でも、シエークスピアの語るように「人みな役者、宇宙はそれを演じる舞台である」という考えには共感している。

二台の車は、別府から高速に乗り宇佐、中津を通過し行橋、荻田北九州空港ICから再び高速道路を利用した。若宮ICから県道三十、二十一号線で犬鳴ダムに到着。この先の犬鳴トンネルは心霊スポットとして全国的に知られている。心配していた天気は、北九州に入つたら本降りとなり、雨は止みそうにもないが、インターネットの過去の天気で参照すると、一月から六月までの雨の日の合計は十二日で月平均二日と言う事になる。乾季ともいうべき現象だ。雷は来そうにないので安心して、犬鳴ダムの最北端になる親水公園の先の登山口へ。案内版も完備され、初心者でも安心して登れるように登山道も大分の登山道よりも立派に整備されている。

司書橋コースと書かれているが名前の由来も平安時代の香りがする。八時過ぎ登山口に到着し、二十五分頃出発。九時十五分頃薦野

峠、四十分頃雨の西山山頂。山頂には自衛隊の設備の格納庫が二つ、ヘリポートに出来そうな広場、自衛隊専用道路が来ていた。一等三角点のある山頂からは、晴れていれば玄界灘が見渡せるらしいが、あいにくの雨と強い風だ。雨に濡れながら写真撮影をし、隊は司書橋コースで車に戻り犬鳴口から犬鳴山を目指す本隊(安部、稲葉、西)と、西山から犬鳴山を縦走する分隊(飯田、中野、牧野)とに分かれた。



(西山山頂にて)

雨の鮎坂山(西山)を後にして薦野峠から、本隊と別れた三人は犬鳴山への縦走路に入る。植林と照葉樹林の尾根道であるが雨に濡れた縦走路は滑りやすいので注意しながら歩くことになる。薦野峠

から三十分位のピークを過ぎた鞍部あたりに番兵跡といわれる要塞跡に出る。鉄塔を過ぎると鹿見岐れという古賀・久山・若宮三町の境界に出る。この辺のピークで大きな木の下で昼食小休止。十五分位休憩して十一時四十分ごろ出発。木段の急坂を登り椿峠を過ぎると前方に犬鳴山が視界に入る。この辺からピークを左に巻きながら縦走路を歩かため眺望は得られない。薦野峠から約二時間で猪野岐れに着く。山陽新幹線福岡トンネル(約六・三キロメートル)が犬鳴ダムの真下を東北東から西南西に走っている。さほど実感はないが様々な夢を乗せ毎日行き交っていると思うと楽しくなる。縦走路を東西に横切る舗装道路に出ると犬鳴山へは十五分だ。2

薦野峠(こもの)から二時間半、犬鳴山山頂到着。本隊が待っていた。そこで記念撮影となったが、デジタルカメラの一台が雨のためずぶ濡れになりいかれてしまい、携帯電話の教訓が未だに生かされていなかったことに気付く。犬鳴山からは南東尾根に向かい百メートル辺りで真南の尾根を下る。二、三百メートルで谷沿いの登山道を行くと藤七谷に出る。登山口は若宮と久山町を結ぶ県道二十一号線の旧道にある。今回の帰りの温泉は、犬鳴ダムの東三キロ辺りにある脇田温泉であった。

参加者：安部、飯田、稲葉、中野、

西、牧野



(犬鳴山山頂にて)

由布岳(豊後富士)

(五月月例山行)

土居慶典

五月の山行は由布岳と聞き、是非参加しようと思ったが、強行軍にはちよつと不安があった。

三、四年前から腰が悪くなり、



(日向岳にて)

良くなつたと思つたら今度は膝、一時は歩くのもやつとの思いだったが、最近良くなって、低い山に行けるようになり、参加することにした。

当日、直接由布正面登山口に集合と言うことで、朝六時四〇分ごろ着くが、まだ誰も来ていない。やがて、皆がそろつてきて、総勢十一名で七時過ぎに出発。

登山口で決められた今日のコースは、直接頂上に登るのではなく、日向岳廻りで登ることになった。まず、正面登山口から登りはじめ、牧草地のゲートを過ぎたらすぐに東に、山麓の自然観察路に入る。この季節、新緑が美しく、清々しい気分になる。登山口から約一時間十分で日向越手前の分岐に

着いた。ここから右に入り、途中では林の中にある密かな池などを見て、十数分で今日最初の山頂、日向岳に着いた。時刻は八時三十分、盛りを過ぎたミヤマキリシマが点々と花を残している

小休止したあとは、今度は北に下り、へべ山の小さなピークを過ぎて九時過ぎに日向越に着いた。先ほどの分岐の少し上だ。そのまま峠を通過して、いよいよ本格的な登山道の登りとなる。最初のうちはそれほど急な登りではないのだが疲れた。徐々に傾斜がきつくなり、樹林を抜けるあたりから次第に険しい登りとなった。クサリや梯子、固定ロープなどの登りが続く。先がつかえて一時ストップが何度かあり、その都度休憩状態になり、足を休ませるからおおいに助かった。

岩場の登りを過ぎて、ミヤマキリシマの稜線に出ると剣ノ峯の分岐。このあたりの花はまだ、ほとんどがつぼみであった。分岐をまっすぐ進み、十一時過ぎに東峰へ到着。

山頂は日曜日とあって、大勢の登山者でにぎわっていた。天気はよいのだが、黄砂の影響のようで、景色は霧がかすんでしまっている。九重の方は全く見えない。別府や大分方面も全く霧の中である。

写真を撮ると西峰に向かう。下りの登山道脇には、たくさんのイワカガミが今満開だ。マタエにつくとそのまま、西峰の岩の登りに取り付く。石川さんが女性のスト



(ミヤマキリシマと由布院の町)

を過ぎているのに、まだ人が登ってくる。こんな時間に登ってくれば、下山時には薄暗くなるのではないかと心配した。

二時三〇分、合野越に到着。ここでゆつくり休憩。そして今日五つ目のピーク、飯盛方城を目指す。いよいよ最後の登りだ。飯盛方城は合野越から見あげるとかなりの急登のように見えるが、登ってみるとそれほど長い登りではなく、わりと早く山頂に着いた。

山頂で西さんから「今何度だと思ふ？」と聴かれ、「まあ、一六〇一八度くらいかな」と返事すると、「二二二度だよ」と返事すると、暖計は確かに二二二度を指している。家に帰って新聞を見たら、豊後大野市は三十六度とあり、後でなるほどと納得した。山頂では風が強いのに全く寒さを感じなかった。



(由布岳西峰にて)

草の斜面を正面登山口に向かって下山開始。午後三時半ごろ登山口に着いた。心配していた膝も悪くなく、安心する。また参加したいと思いつつ帰途につく。今日の山行は日向岳、由布東峰、西峰、飯盛方城、それに小さなへべ山を入れれば五つのピークを登ったことになるという。久しぶりに皆と登れて、楽しい一日であった。

参加者：飯田、石川、岐部、久保、神麻、土居、得丸、遠江、中野、西、牧野、

附記 五月は今年度最初の月例山行。今年度の山行テーマ「富士の名の付く山に登ろう」の初回は、まずは大分の代表的『富士』である豊後富士（由布岳）へ。この山行の報告を、今回はベテランで長老の土居さんをお願いしました。（K・I）



涌蓋山（珍珠富士）

（六月月例山行）

岐部 威吉

今回の目標の涌蓋山は大分・熊本県境にそびえ、その秀麗な姿から珍珠富士（大分県側）や小国富士（熊本県側）と呼ばれている。六月一七日（日）午前四時起床、寝室の窓をあけると曇で、天気は期待できそうにないが、昨夜飲んだアルコールがまだぬけてなく、頭がぼんやりしているせいかもしれないと思いつつ、旅したくにかか。

出発の集合場所のサニーに着いた。一番乗りで気分がいい。西さん、飯田さん、石川さん、牧野さん、得丸さん、神麻さんと私と総勢七人がそろった。

一行は二台の車に分乗して、今日の登山口と決まったの九重町の地蔵原へ向かう。途中でコンビニに立ち寄り、食糧等の調達。私は例によりビールを買い込む。

七時三〇分に地蔵原に到着。私は以前、ひぜん湯から登った経験があるが、かなり遠かった記憶がある。今日の地蔵原からの登りは距離的にどうなるのかなと考えた。飯田、石川両名は、車を下山するひぜん湯に置きに行き、引き返して後を追うという。残る五名は登山靴を履きかえ、それぞれに身

支度をして、西さんを先頭にして八時少し前に出発する。

古い林道を登り、スギ林を過ぎ、登山口から約四〇分、真新しい林道に出る。ここで小休止していると、下山口に車を回した両名が追いついてきた。

林道を横切り登山道にとりつく。道は徐々に急になり、汗がふき出してくる。しかし、山でかく汗はさらっとしていい、いい汗だ。林を抜けると、道の脇にはミヤマキリシマが咲いている。時期的に少し遅いが、まだあちこちに満開の花が残っている。

登りはじめておおよそ二時間、傾斜が緩くなり、広いササの斜面に出たらやつと山頂だ。

（涌蓋山頂にて）



風が強くて、絶えず霧が流れている。朝めざめた時に感じたほどより感があたって残念ながら、ガ

スがかかっていてすっきりとした展望は得られなかった。少し残念に思う。山頂付近にはまだたくさのミヤマキリシマが咲いていて、山の斜面を彩っていた。

三六〇度の展望が得られる山頂なので、遠くに八丁原の地熱発電所がぼんやり見える。九州には八ヶ所の地熱発電所があるが、九重連山の九電の発電所は昭和五二年に第一号機が営業運転を開始し、今では出力十一万キロの日本最大の地熱発電所だ。これが見えただけでも大きな収穫だ。

山頂には山口県下関市から来た数名のパーテイも到着して、しばし交歓。三角点でいつもの万歳の儀式をすませて、さて・・・風を避けて何処かで弁当を・・・と、思っているやさきに、下山命令・・・で、かなり疲れが出た。時刻はまだ十時三十分前だし、仕方ないと思いつつもついていく。雌岳



を過ぎ、どんどん下っていく。何処までお預けかと思っていたら、涌蓋越を過ぎ、林を抜けて平らな草原に出たところで昼食に決まった。

やれ、やれ、ビール、ビール・・・石川さんが丸い大きなスイカをザックから出して、これを割ってみんなにすすめる。美味しかった。よくもまあ、こんな重いものをここまで担いできたものだ。おかげで喉の渇きもふつとんだ。約四〇分間、ゆっくりと昼食時間を楽しんで腰を上げる。この後のスケジュールは、ひぜん湯に下りたら、八丁原ヴェーホテルでお風呂に入れてもらおうということになった。なんでもこのホテルは日本山岳会員の甲斐さんが経営するものだと聴く。

草原の長い下りを終え、林を抜けて橋を渡るとひぜん湯だ。飯田、石川両名は車の回収で地蔵原へ。残りは八丁原ヴェーホテルへ歩く。ホテルに着くとオーナーの甲斐さんが出てきた。素晴らしいメンバーもいたもんだ。今日は特別いい男に見える。

甲斐さんが新築の別館を案内して見せてくれた。車を回収してきた両名もそろって、その後は温泉三昧。風呂上がりのビールが実にうまい。山を楽しみ、美味しい空気をいっぱい吸って、これが生きる喜びだと感じた。

参加者：飯田、石川、岐部、神麻、得丸、西、牧野

琴路岳(能吉富士)

唐泉山(肥前富士)

(七月月例山行)

久保洋一

豊かさとは一体なのか？ 駆け抜ける時のせい？ リアリティのない時代である。身のまわりの事が希薄な意識のもとに忙しなく過ぎ去っていく。自分を見失いそうだが、何がリアリティなのかの自分なりの追求をしてみた。

結果、自然と向き合う自分がそこにいた。

さて、今月七月の月例山行は地域の〇〇富士のテーマに沿った佐賀県の琴路岳(能吉見富士・ノゴミフジ)と唐泉山(トウセンザン・肥前富士)だ。

中野さんの予定では時間が許せば、周辺の山にもう少し足を伸ばさずはだつたらしい。しかし、天気も良くなき結局今回はこの二山で終わった。

参加者は西孝子さん、中野裕さん、そして久保洋一の三名だけ。少し寂しいが、静かな山登りが期待できそうである。

朝、五時、中野さんの車に西さんと私が便乗させてもらいサイニスポーツを出発。高速道路に乗り、途中、佐賀の金立SAに立ち

寄り、嬉野ICで高速を降りた。佐賀県といってもかなり長崎寄り、長崎空港のある大村が近いところである。高速を降りてからはカーナビの威力で知らない土地にも拘らず、極めてスムーズに登山口に到着した。大雨警報の後で、土砂崩れの心配をしながら林道を車で登って行く。木の枝が道路をかなり塞いでいるところが何ヶ所あったが、後部座席の不安をよそに、どんどん突き進んで行く。

峠のところまで来るとそこが登山口だ。五ヶ六台は停められる駐車場がある。その横には林道開通の記念碑か？ 石碑がある。七時四五分、登山開始。一三分ほど、雨に濡れた登山道をウグイスの鳴き声を聞きながら進むと、木で組んだ展望台あり。でも、小雨で木が濡れていて滑りやすかったので、展望台を横目で見ながら通過。

展望台の場所から北の方向を向くと、次に登る唐泉山の端正な山容が途中遮る山もなく真正面に見える。展望台のところが一つのピークでそこから少し下り、またちよつと登るとそこが琴路岳(標高401m)の山頂だ。山頂には杉木立があり眺望はあまりきかない。でも、立派な三角点があった。以上登り約四六〇m、所要時間一六分の極めて短い山登りであった。



(琴路岳山頂にて)

次は唐泉山だ。この山は琴路岳から北北西に直線距離で約四、二km程の所にある山である。林道を引き返し、小学校の分校を二つ過ぎ、鳥越峠に向かって進む。峠の手前から再び林道に入り、山の南面を東から西に半周し、山の西側にある四叉路に九時ごろ到着。そこに唐泉山案内板があった。広場になっているので車は一〇台くらいは駐められそうである。さて、車はそこまでで、九時〇六分登山開始。

舗装している林道を登って行くのと、登りも一段落したところで舗装は途切れた。道二つに分かれている。西さんの判断で、山頂から見て下側の道を進むことにする。登山者があまりないのか道路(巾三m位)は雑草がいっぱいだ。さらに突き進んでいくと、山頂に向かって真つ直ぐに延びている階段の参道があった。

私達の登っていた道は、横から接続する形で参道にぶつかったのである。九時一二分。先ほどの

もう一つの道も同じように少し上で参道に繋がっていた。後はこの階段を山頂まで一気に登っていくだけ。途中佐賀銘木一〇〇選のシイ(推定樹齢300年)があり、歴史を感じる参道である。



九時三七分に山頂到着。登り

約650m、所要時間三二分である。唐泉山(標高410m)山頂はまったく眺望がきかないが立派な石造りの祠と神社があった。

例によって西さんの山頂での儀式を行い、神社に参拝して九時五四分に下山開始。下り始めてから、降っていた小雨が今回の山登りの終わりを意識してか本降りになつてきた。

一〇時一九分駐車場の四叉路に到着。その後移動し、嬉野温泉に入つて、帰途へ。大分には、一五

時三〇分頃到着。
(平成35年7月8日(日))
参加者：久保、中野、西

支部の先達と語る②

第二回の今回は、前支部長の野口秋人博士(会員番号4519)の紹介です。野口博士は別府市の野口病院の院長として、医者としても日本の臨床外科学会の第一人者であり、特に「パセドー氏病」をはじめとした甲状腺の病気の治療に関する研究は、国内でも高く評価されていきました。そしてそれらの功績により、昭和五十一年には第二八回大分合同新聞文化賞受賞をはじめ、昭和五十三年、日本医師会最高優功賞受賞、昭和五十八年、第三回三宅賞受賞、第四二回西日本文化賞受賞、そして昭和六十二年には勲五等隻光旭日賞の叙勲を受けています。昭和四〇年に東九州支部第二代の支部長に就任以来、亡くなられる平成元年まで約二四年間支部長を務められ、支部の活動の先頭に立って大分の山の若者たちをリードしてこられました。先生の思い出について、大林正彦会員に書いて頂きました。

「野口秋人先生 の思い出」

大林 正彦

野口秋人先生は、私の山への夢を大きく与えて下さった登山人でした。先生は、明治四二年一月二十九日、長野県生まれで、旧制松本中学、松本高校（現信州大学）へと進まれ、松本高校に内田（旧姓）秋人ありと山の本に出ています。穂高の奥又白の池から眺める前穂高のコースは松高ルートとして有名ですが、その中には先生の名前が残っています。

先生は、松本高校を出て後仙台東北大学に進まれ、その後東大付属病院の医師として勤務の後、昭和一五年に野口病院に迎えられるました。医学界では甲状腺の治療に關しては日本一の名医と言われていました。先生のバセドー氏病に關する研究が評価されて、昭和六二年には勲五等雙光旭日賞の叙勲を賜りましたが、そのお祝いの席には私たち若い山の仲間までたくさん招待されました。

大分の山、特に鶴見、由布しか知らなかった私たちに、日本アルプス登山という、当時の私たちにとっては海外登山に行くほど遠い夢の話しを、実現させて下さったのも先生でした。

昭和三六年、夏の穂高に初めて



（あせび小屋にて）

連れて行って下さいました。上高地に入り、信州大学のテントに入って洞沢で合宿したこと、信大の学生による岩登りの訓練を受けたこと、穂高を縦走し、奥穂高山荘では今田重太郎さんと、槍穂高縦走で槍ヶ岳山荘では穂刈さんと、先生は親しく懐かしそうに話をされていたことなどを思い出します。

帰ると先生の所に信州大学から私たちの合宿の反省文が届いて、来年に向けて岩登りの訓練に励んだものでした。先生は岩登りが好きで、年をとられても阿蘇山の縦走などによく出かけました。ツバキの花が大好きで、世界のツバキの木を集められていました。何処かに行くとき必ずツバキの情報を集め、私たちに話して下さいました。今は、宮崎県椿山森林公園内に野口記念園として保存されて

います。

大分の近代登山への草分けの一人といえます。日本山岳会の支部長の昭和四〇年、コイ・モンデイ登山に成功され、ヨーロッパも集まりました。特に、昭和四六年江藤、岡崎両名によるアイガー北壁登山など若い人たちがよく、先生の所へ通ったものです。

医者として先生は、患者さんとは丁寧なことで接しておられたことでも有名ですが、山の話になると信州ことばでよく話されておられました。

コイ・モンデイの遠征で、参加する遠征隊員の会社の取り扱いについて、その会社の社長に直接話しをされたりしましたが、その時の激しい口調がまだに記憶があります。



ら離れま
せん。山
への情熱
はものす
ごいもの
があると
感じまし
た。

東九州
支部創立
二〇周年
記念行事
は、先生
が支部長
として陣
頭指揮を
とり、こ
れには今
西錦司博
士、川喜
多二郎博
士が講演のため来県されました。



また、高千穂の五カ所高原（祖母登山口）で、日本山岳会東九州支部主催で第一回ウエストン祭を開催し、今西会長や西堀栄三郎博士などが来賓に見えてお祝いのごちを頂きました。これは今でも、その後東九州支部から独立した宮崎支部が受け継いで開催しています。

晩年は、ヒマラヤトレッキングにたびたび出かけられていました。特に中国側からチョモランマ（エベレスト）を見たいと、チベット行きを楽しみにしておられました。平成元年二月、中国雲南省へツバキの見学に旅立つ三日前に突然たおられ、一〇月九日にかえらぬ人となりました。

上高地河童橋に立つたびに、先生と楽しんだ夕暮れの岳沢から穂高の眺めや、「いいですねえ」という先生のことばが思い出されま

(宮崎椿山野口秋人記念園)



す。先生は今ごろは穂高を眺めていますか？いやそれともツバキかな？

会員所属の山のクラブの紹介コーナー (No.4)

「大分緑山岳会」

昭和60年ころより会のような集団があったが、第1回定例会(昭和63年12月14日)をもって創立日とし、大分緑山岳会の記念すべき最初の山行は、その年の年末から年始にかけての槍が岳北鎌尾根と大山(鳥取)に2パーティを出し、それぞれに良い結果を出せた。

名称 大分緑山岳会 (大分県山岳連盟所属)

創立 昭和63年12月14日(水)

会長 甲斐一郎 創立から平成15年3月まで
安東桂三 平成15年4月から現在

会事務局 大分市中戸次897 足立貴美子 方

会員数 16名 発会当時は若い年代で構成されていたが、次第に仕事、結婚、その他のしがらみにより世代交代し、現在では中高年の集団になった。

創立の趣旨 登山活動を通じて会員相互の親睦を深め、登山技術の向上および自然愛護の推進をする。

(会則第3条より)

- 活動内容
- 1、4月定例総会にて、年間計画(毎月1回の定例会、定期山行とスペシャル山行)をきめる。
 - 2、定例会は第1水曜(18時から)大分市内で。
 - 3、大分県山岳連盟の諸活動に参加する。
 - 4、毎月1回 通信『緑』発行。 会報発行(不定期)

昨年4月から本年6月までの山行

2006年 4月 黒岳縦走、 5月 市房山、 6月 小松尾山、 7月 黒岳縦走(SP)、小表山、鳴子川
遡行(SP)、 8月 傾山交差縦走(官行コースと東傾コース)、 9月 ロープ
ワークと大洲ボルダリング、 10月 鳳凰三山縦走、 11月 雁股山から経読岳縦走(忘年会)、
12月 韓国岳、高千穂の峰、夷守岳横断、(年末年始)小渋川から赤石岳(SP①)

2007年 1月 ニュージーランドトランピング(SP②)、伽藍岳から内山縦走、 2月 仙岩山、 3月
新百姓山、 4月 傾山、 5月 爺ヶ岳東尾根から鹿島槍ヶ岳西沢下降(SP③)、祖
母山周回、 6月 両郡橋から高崎山ロープ搬送 (SP)

SP山行の内容を紹介すると

- ① 年末年始の赤石岳(南アルプス) 4名。 ルートは小渋川の遡行。川の渡渉が20回位ありお尻
ぐらいまで濡れて、3時間ほどかかった。無人の広河原小屋で焚き火し、翌日より、だまし平へ尾根
のラッセル、途中1泊(キャンプ)し、赤石岳頂上へ。下山も渡渉が3時間位、濡れて終了。
- ② 1月のトランピングは 5名。 本会の本間会員がニュージーランド在住なので、日本人ハイカーが
行かない穴場を堪能した。
- ③ 5月の北アルプス行 5名。 積雪期だけにルートになる爺ヶ岳東尾根を登り、冷池へ。鹿島槍往
復後、赤岩尾根下降(上部より西沢ヘルート変更)、キャンプは東尾根1850M、冷池。例年より積雪
少なく、東尾根下部で苦勞。また(今なら下れると)状況判断し、西沢下降をした。

今後の山行計画 ☆8月始めの燕岳から常念岳縦走(北アルプス)。 ☆2008年2月の大山合宿。

☆他に 大分県内4回、九州内4回 予定。

緑の会員のすべきこと、せねばならないこと

会則に決められていることが全てですが、安東の私的な考えとしては、自信に満ち溢れた山行をする集団であってほしい。 技術、体力、判断力をそなえた強い岳人を目標にしたい。 中高年と言われても、それぞれの年齢において出きるだけのことをする。 たとえハイキングであっても、人の後に付いていくだけではない、正しい判断が出来る、たとえ冬山に登れなくても、たとえクライミングが出来なくなっても世の中(登山界)の遷り変わりが解るような会員であればと思います。

この『会員所属の山のクラブ紹介コーナー』を通じて、もし良ければ、緑の仲間と登る方を募集します。

北山荘で

去る五月九日「レリーフを守る会」の集会で、北山荘に行く。植物園前に十二時集合で、待ち時間を利用して園内見学。六十歳以上は無料である。熱帯植物を見るため、温床めがけて急いだ。

空の機嫌が悪く、大粒の雨が降り出す。自家用車に乗せて頂き、北谷に近づいたころ雨は止む。レリーフの前で昼食。岩にみどりの苔がついている。下の方は水が流れるためか、苔はついていない。十三回忌のときに岩の下に石を置いたが、流れていた。上段の一等三角点(今西邸のり移す)に挨拶。北山荘の清掃だ。新しい材木で棚をつけ、風呂を造りかけていた。そのあとは十九名でいろいろをかこみ、焼き肉だ。私はかりて来た猫のように静かである。手みやげが時々まわってくる、本日の主役は岩坪吟子会員で、「今西錦司をしるぶ」の話である。岩坪五郎会員と夫婦で参加している。今西先生の機嫌をそねた事があるらしく、レリーフを尋ねたのは初めてのこと。

宴たけなわにして、ぼろりとこぼす参加者の中には、今西先生に

お会いしたこともなく、山行もなしという方もあり。それでもレリーフを守る会に参加しているのだ。京都支部の三代の支部長が揃い、昨年秩父宮賞を頂いた方は私の左隣りに座っている。この顔ぶれは私をのぞき天下一の山きちばかりの集団である。話しは先生のことより今のことに進み、場面を思い出しては大笑い。

本日の講師、吟子会員は、先生の入歯の主治医である。私と人吉の山行で一夜をともしした時、夕食後の部屋で、歯を磨きながらおしゃべりしよう、というくらいよこれにきびしい方だ。今年の年賀状で歯科医を続けていることを知り、五月十一日、入歯歯をお願いしたところだ。

話しは横道にそれたが、十日はレリーフの清掃をし、花をあげ、昨夜と朝早く帰った方で、人数は少なくなつたが記念写真を。ご機嫌な顔で写る。二日酔いの顔も・

再会を約しながら、午前十時にレリーフを後にする。レリーフへの道も谷沿いではなく、新しく峠越えになり、三十分で車止めに着く。

東九州支部の皆さん、来年は私が話しをする予定です。北谷のレリーフへ一緒に行きましょう。写真を見て、お知り合いの方が何人かいますか?レリーフの先生の顔が写っていません。



(今西錦司のレリーフの前で)

とか尾鈴山などでも堪能することが出来る。私が特に好きな稜線は大明神越から新百姓山にいたる尾根道と、八丁越から祖母山にいたる稜線だ。さほど険しい登りではなく、素晴らしい樹林の中にあるける贅沢さはたまらないものがある。

しかし、そのようなところまで行かなくても、身近な里山にも、隠れた、小さな、けっこう素晴らしい稜線がある。里山で自然林といえれば神社や寺の境内林が代表的で、他のところはほとんどがスギかヒノキの人工林になってしまっている。しかし、そんな中にも、稜線や谷筋には、造林しにくいところもあって、伐り残された林が残っているところがある。このような里山の小さな天然林の稜線歩きをいくつか拾ってみたい。

中尾山(三ノ舌)

旧佐賀関町神崎から佐志生に抜ける、もみの木トンネルの手前の、中尾から佐賀関の志生木に通じる峠道は、縦ノ木山の登山口として、大分百山に紹介されている。この道の中尾ダムの上、二つのヘヤピンカーブの少し先で、登山口から三〇〇mほど戻ったところに、西(左)に鋭角にもどるかたちで分かれる車道がある。この道は舗装されており、わずかに上りながら二〇〇mほど行くと峠で、道は右に急カーブして下り始める。この道はそのまま下ると神崎の湊へと

私の無名山ガイドブック

飯田勝之

里山の稜線歩き

(その1)

私の山歩きの楽しみの一つに、自然林の中の稜線歩きがある。稜線歩きの醍醐味は、祖母・傾・大崩山系が九州では代表的だが、霧立越や向霧立越、あるいは市房山

通じている。



急カーブの峠がこの稜線の取りつきである。道脇のブッシュをかき分けると、小さな稜線がわずかに下り気味に続いている。ヒノキとスギの人工林の稜線を少し下つて、また少し登ると自然林の中の小ピークとなる。ナラやクロキ、ヒシヤカキなどの中低木の中、踏み跡をたどってを緩く下っていくと、次第に林相が古くなる。

そして、次の鞍部から先は、これがこんなに里に近くて、高度二〇〇mしかない稜線かと疑うほどに、大きなカシやシイ、タブといった照葉樹が、極相林の状態をつくりあげている。深山の鬱囲気を楽しみなながら、大きな照葉樹の中、ゆったりと起伏する稜線散歩を楽しめる。三つ目の大きな鞍部を過ぎるとナラや赤松が目立つようになり、明るい木立の稜線をゆるく登りつめると小さなピークに達する。そこには四等三角点があり、山頂を示す標識も一つある。

荒平山(三六六)

県道白杵大南線の大分市吉野の中心、辻から野津町を経て三重に通じる広域農道がある。この広域農道を辻から入って約二キロのところ、臼杵市と犬飼町をつなぐ古い狭い道が交叉する、右に行けば長畑の集落である。この交差点の少し手前に広域農道の緩い峠がある。ここを荒平山の登山口にしよう。ブッシュを分けると古い林道の跡があり、それを横切り照葉樹の斜面を直登していく。この登りもけっこう楽しい。約一〇分の急登が緩くなると大きなシイの木立に囲まれた小ピークに着く。頂上から南西に張り出した稜線の肩で、ほぼ平らな稜線が東に延びている。シイ、カシ、タブなどの照葉樹の下の心地よい稜線歩きとなる。時折りシノタケがまばらにあるが、邪魔というよりも稜線歩きに変化を与える香辛料にさえ思える。少し行くと小さな鞍部でそこから先はヒノキの林になり、稜線の傾斜が急になる。左(北)向きに方向を変えながら、稜線に登るとヒノキの下に低木が多くなり、軽いヤブこぎだ。古い林道を二度横切つてなお、軽いヤブこぎしながら進むと大きなカシの木の下に小さな石の鳥居と、石の祠が目につく。その脇を通り、ヒノキ林と天然林の境の稜線に登っていくと林の中に無造作に置かれた石の手洗い桶、その先にはまた石の祠がある。祠の横を通り、さらに一、二分、緩い登りの先が灌木の中の小広場となつていて、真ん中に苔むした三等三角点がある。ここが山頂で、その向こうはヒシヤカキやリョウブなどの猛烈なブッシュである。

ある。祠の横を通り、さらに一、二分、緩い登りの先が灌木の中の小広場となつていて、真ん中に苔むした三等三角点がある。ここが山頂で、その向こうはヒシヤカキやリョウブなどの猛烈なブッシュである。



(荒平山の鳥居と祠)

お知らせ



八月月例山行のご案内

- ・月 日：八月二六(日)
- ・目的地：矢筈岳(266, 6m)
(姫島富士・姫島村)
- ・出 発：八月二六日午前五時
サニー出発
- ・現地集合：国東市伊美港七時集合

九月月例山行のご案内

- ・月 日：九月八日(土)九日(日)
- ・目的地：赤星山(453, 2m)
(伊予小富士・愛媛県 四国中央市)
- ・出発：七日(金)夜サニー出発
- ・七日の夜出て、八幡浜を八日早朝に発ち、二日間で赤星山とその近くの「法皇山脈」の山をいくつか登ります。出発時刻等詳しいことは、参加者同士の相談により、を決めます。

一〇月月例山行のご案内

- ・月 日：一〇月七日(日)
- ・目的地：月出山岳(788, 7m)
(日田富士・日田市)
- ・出 発：午前五時サニー出発
- ・現地集合：日田市月出山の集落へ七時集合

※ 月例山行の日程等が四月の定例総会資料の記載と変わっています。ご注意ください。

※ 参加希望者は8月末までに支部事務局にご連絡下さい。

事務局よりお知らせ

- 一・第二三回全国支部懇談会のご案内
 - 懇談会
 - ①主催 岩手支部
 - 「宮沢賢治とイーハトーブの山々をたずねて」
 - ②日時 一〇月六日(土)七日(日)
 - ③場所 岩手県八幡平市 「八幡平ハイツ」
 - ④会費 一六,〇〇〇円
 - ⑤日程 六日(土) 一五,〇〇〇 受付 一六,〇〇〇 記念講演 「宮沢賢治と山歩き」
 - 二・「福岡支部設立五〇周年記念行事」のご案内
 - 祝賀会
 - 一・日時 九月二九日(土) 一六,〇〇〇〜二〇,〇〇〇
 - 二・場所 福岡市中央区天神 一四一
 - TEL 092-712-8855
 - 西日本新聞会館一六階
 - 福岡国際ホール(志賀の間)
 - 三・記念講演「ヒマラヤの東」 講師：中村 保(なかむらたも)氏
 - 四・祝賀会 一八,〇〇〇〜二〇,〇〇〇
 - 五・会費 一〇,〇〇〇円
 - 三・記念ハイキング
 - 一・日時 九月三〇日(日) 九,〇〇〇〜一四,〇〇〇
 - 二・場所 太宰府〜坂本八幡〜国分寺跡〜岩屋城址〜大野城址〜太宰府天満宮

三、参加費無料(昼食は各自持参) 東九州支部入会申込書の未提出の方は、提出して下さい。(写真を支部事務局にご連絡下さい。お忘れなく)

三・会員の移動のお知らせ

茅野享生 〒861-6561熊本

県天草市下浦町二〇九〇一―二

「ケアハウス聖和園内」

※昨年七七歳の喜寿お祝い登山を横岳で行った時にはお元気で、他県へ移転することなどは話していませんでした。青少年体験登山の返事が上記の住所になっていて、驚いて電話したら、元気な声が返ってきました。別に体調が悪いのではなく、永久の住みかとして選んだとのことです。「五月七日に入所しました。お世話になりましたが、今後ともよろしくお願ひ致します。当施設は、ケアからホスピスまでです」とのことです。

後記

ってました！ついに、この夏夢がかないそうです！晴れますように！
(あずさ)

○ 原稿に目をとおしていたら、ニュージールランドトランピングという語句がありました。

○ 「ソツ、これって何？」。そういうえば、ヒマラヤトレッキングという言葉聞いたときも、「ソツ、これって何？」でした。あれから幾年。

○ 今は目ざせ！大分百山完登 (長野)

○ 六月の別府の群発地震の時、ちよど別府の裏山、鶴見北尾根を歩いていた時に一度大きな揺れがありました。ゴーンと山が鳴って揺れるのを感じました。

○ 数年前に桑原山の県境尾根を下っていて、大きな岩棚の上で休んでいる時に大きな地震がありました。あの時にも山の大きなうなり声を聞きました。

○ でもその時には、山の鳴る音よりも、自分が乗っている岩が崩落するのではないかと恐怖の方に気をとられていました。韓国の釜山や蔚山には、日本では考えられないような、細いのつばビルが、しのぎを削るように建っていました。

○ 「大丈夫か？」と聞くと、韓国は地震がないことに自信を持っているとの返事でした。
(K・I)

「ソツは何処？」

この写真は何処から何処を撮ったものでしょう？



お分かりの方は事務局まではがきでお知らせ下さい。当たった方には記念品をさし上げます。(二名までで、正解多数の場合は抽選します。)
締め切り八月三十一日
前回の正解は障子岳から見た祖母山でした。

四・会費納入のお願い

本部会費の納入をお願いします。また支部会費の未納の方は早急に納入して下さい。

五・新入会員の紹介

会友でありました牧野信江さんが本部会員に入会しました。

六・入会申込書提出

○ みなさん残り残した山はありますか？北アルプスの中で唯一残った赤牛岳！ずーと気にな

○ 山月孝氏(生物担当)の写真集「由布の花たち」、あの数多くの花はロープの向こうに隠れているのか、と思いつながら、陣ガサの群をみて猪ノ瀬戸(下山) (安部)

日本山岳会東九州支部報 第38号

2007年(平成19年)7月25日(水)

発行者 梅木秀徳

編集者 飯田勝之

発行所 〒870-0021

大分市府内町1-3-16

サニースポーツ内 西 孝子方

TEL・FAX 097-532-0926

題字 (故)佐藤正八